

二〇一六年度 卒業論文

妙好人と現代社会

— 柳宗悦の「無対辞」を通じて —

コピー — 禁 廠

L130047

木村友讓

目次

序論

本論

第一章 妙好人とは

第一節 妙好人のいわれ

第二節 妙好人と信心

第三節 妙好人のことは

第二章 柳宗悦と妙好人

第一節 因幡の源左

第二節 柳宗悦の宗教観

第三節 「無対辞文化」

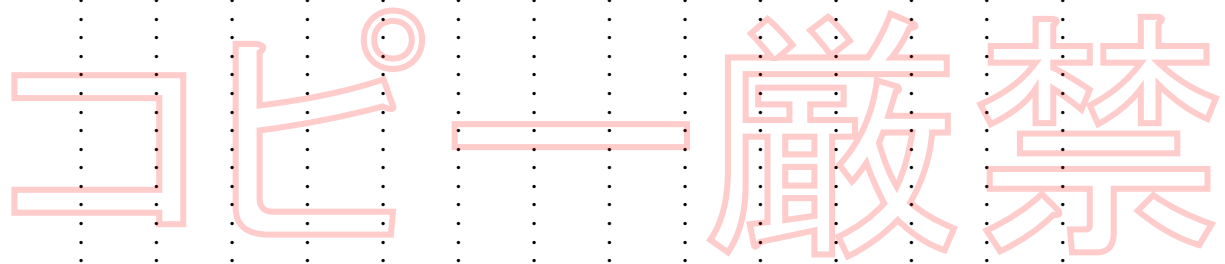
第三章 現代社会と妙好人

第一節 ゆだね、まかせられる安心

結論

註

参考文献



2 7 2 6 2 3 2 0 2 0 1 7 1 6 1 2 1 2 7 6 3 3 3 1

序論

「妙好人」とは、どのような人のことを指していることばなのだろうか。仏教学者である鈴木大拙（一八七〇—一九六六）は自らの著書の中で、

浄土宗信者の中に「妙好人」の名で知られている一類の人達がある。ことに真宗信者の中にそれがある。妙好というは、もと蓮華の美わしさを歎称しての言葉であるが、それを人間に移して、その信仰の美わしさに喩えたのである。¹

と述べている。また、鈴木大拙の教え子であり、宗教哲学者、思想家でもある柳宗悦（一八八九—一九六一）は著書の中で、

「妙好人」とは芬陀利華、即ち淨い白蓮華を意味し、念仏宗、特に浄土真宗で、篤い信心をいただいた在家の者を指していふのである。多くは名もない田舎の無學な人たちであるが、俗に在つて淨い念佛の一生を送つた人達を敬つてしか呼ぶのである。²

それで「妙好人」とは、白い蓮華のような淨らかな信心を、篤く身につけた信徒たちを讃えて呼ぶ言葉なのである。それゆえ妙好人は、何も念仏系の仏者のみに現れるわけではないが、それがいちじるしく念仏者の間に多く、わけても真宗の信徒に多いことは注目されてよい。³

と述べている。では、鈴木大拙や柳宗悦の、「妙好人に在るとされる「美わし」い「その信仰」や、「篤い信心」、「白い蓮華のような淨らかな信心」とはどのようなものなのだろうか。そして、どのような生活の中でいただく

ことができるのであろうか。

そして妙好人がこれだけ取り上げられている理由として、妙好人のことばがある。エピソードや、詩として、妙好人のことばが多く残っているのである。中でも有名なものが、大和の清九郎（一六七八―一七五〇）、讃岐の庄松（一七九九―一八七一）、長門（長州、六連島）のお軽（一八〇二―一八五七）、因幡の源左（足利源左衛門 一八四二―一九三〇）、石見の才市（浅原才市 一八五〇―一九三三）などである。彼ら妙好人たちのことばには、現代に生きる我々には思いつかないような感性の下で書かれたことば、そして篤い信心の生活の中からのことばが多く存在している。そしてその妙好人たちのことばは、念仏者にとって大切であり、在るべき姿であったため、まわりの人々、後の研究者たちが集め、守り、紡いでくれたのである。そのようなことばを残した彼ら妙好人が生きた時代と言うのは江戸時代から昭和初期であり、現代の科学主義的教育、西洋文化的思想がまだ日本に浸透していなかった時代である。さらにその中でも彼らは、念仏をし、すべてを任せ、ありのままの自然の中で生きてきた。よって、科学的、二元論的に物事を捉えるのではなく、ありのままに物事を捉えることができたのではないだろうか。これこそが柳宗悦のいう無対辞の思想であり、真宗における智慧なのである。

現在にこそ彼らのような妙好人は必要なのではないだろうか。彼らのことを深く知り、またその言葉が生まれた背景を知ることが必要である。では現代ではどうなのだろうか。このことを現在までの妙好人たちのことば、そして柳宗悦の無対辞の例を挙げ考察していく。

本論

第一章 妙好人とは

なぜ「妙好人」と呼ばれる人物のことばが、これほどに研究対象とされているのか。また、何をそのことばの中に見る事が出来るのか。その由縁と真宗への妙好人の入信から考察する。

第一節 妙好人のいわれ

「妙好人」という名前の由来は『仏説観無量寿経』の流通分にある、「若念佛者 當知此人 是人中分陀利華」（以下約）「若し念佛する者は當に知るべし、此の人は是れ人中の分陀利華なり。」⁴から来ている。分陀利華とは白蓮華のことであり、プンダリーカ（pundarika）というサンスクリット語を音写したものである。これは念仏する人を、煩惱、俗世の泥の中から芽を出し、美しい白い華を咲かせる白蓮華に例えたものである。そして善導が『観無量寿経疏』の散善義の中で、

三にはもしよく相続して念仏する者は、この人はなはだ希有なりとす、さらに物としてもつてこれに方ぶべきなし。ゆゑに分陀利を引きて喩へとなすことを明かす。「分陀利」というは、人中の好華と名づけ、また希有華と名づけ、また人中の上上華と名づけ、また人中の妙好華と名づく。この華相伝して蔡華と名づくるこれなり。もし念仏するものは、すなはち、これ人中の好人なり、人中の妙好人なり、人中の上上人なり、人中の希有人なり、人中の最勝人なり。⁵

と著している。善導はこのように「よく継続して念仏する者」すなわち篤い真実信心をいただいている人を分陀利（華）、白蓮華に喩え、その人を褒め讃えて呼ぶ名の中で、最も優れた念仏者という意味の「最勝人」と並べて、妙好人という言葉が登場させている。

すなわち妙好人とは、この俗世の中で、厚く仏教を、特に浄土真宗を信仰し、念仏をし、真実信心をいただき、白蓮華のように美しく、淨らかに生きた人のことを言う。しかし、泥から芽を出し、泥から栄養を蓄え成長をする白蓮華の華に喩えられるように、妙好人においてもやはり必ず煩惱はあるのである。

そして、どの妙好人研究者も記しているように、妙好人のほとんどに共通していたのは無学であったという点である。中には文盲の人もおり、田舎で牛と暮らし、ものを知らなかった。親鸞のように比叡山で学び、その後も死ぬまで様々な經典や本を読んだわけでもなく、今日の学生のように誰かから仏教、真宗の教えを学問的、専門的に学んでわけでもない。しかし、彼の口からは、親鸞が生涯をかけ、やっと辿り着いた境地に至っているような、真理を得た言葉が出てくるのだ。それは、自然の中でありのままを見て体験し、その体験と経験とが、寺院での聴聞と結びついて得られたものだろう。

また、ものを知らないと言うところから謙虚さが生まれるのである。「知らない」ということを自覚することで、ものごとをありのままに受け入れようという姿勢が出来上がるのだ。謙虚さが無くものを知っていると、どうしても自分の知識だけで作ったものさしで物事をはかろうとする。よって己の考えと違うもの、対するものは否定してしまうのである。しかし妙好人の考えは、否定せず、分別せず、差別せず、人間の物差しでは物事を推しは

からないのである。周りから見れば変わった人かもしれないが、それは妙好人特有の、ありのままを見る、無分別からうまれる行動なのである。

このような特徴は日本各地の妙好人に見られる。そして彼らの多くが信仰していたのが「浄土真宗」なのだ。鈴木大拙は、

或る立場からすれば、誰もかれも、末代愚痴で末代不善の徒なのである。他力宗の先途は、只管に單刀直入に、個己の源底を尽さんとするに在る。その対機となるものは、何といつても、「物知り」よりは「物知らず」である。始めから何か「物知り」などという自覚のあるところでは、他力は容易に受けられぬ。が、もとより「自分は無知である」と覚悟している胸の中へは、割合に浸透し行き易いものがある。末代とか末法とかを繰り返すのは、つまりその狙いは、それでもって学問や智慧の箔を剥ぎ落そうとするのである。この薬法が見事利いたので――そうしてそれは実に利くべき理由があるのである――、それで、他力宗には数多くの妙好人を生じたわけである。そうして他力宗はまた多くの信者を「無知文盲」で社会的地位に余り恵まれぬい階級の中に見出す。⁶

と自らの著書に記している。「或る立場」とはまさに阿弥陀如来のことであり、阿弥陀如来の立場からしたら、我々はみな煩惱具足の凡夫なのである。ものを知っており、博学であり、あらゆるものを学んでいる、といった「物知り」などではなく、謙虚であり、「無知」を覚悟している「物知らず」の凡夫の心へこそ、阿弥陀如来の他力の本願が何の疑いもなく伝わるのである。

貧しく、無知であり、学べず、煩惱具足の凡夫、このような環境の中から芽を出し、美しい白蓮華を咲かせる、浄らかな信心をいただいた念仏者。彼らこそが妙好人なのである。

第二節 妙好人と信心

妙好人たちはどのようにして、妙好人となったのだろうか。第一節で述べたようにその背景には、自然のなかに生きており、貧しく、そして無知からの謙虚さがあることは言うまでもない。しかし、妙好人が皆初めから篤く熱心な信仰者であり、中でも念仏に生きる浄土系、真宗の信徒であり、そして善導が言うようなまるで白蓮華のような姿勢で、日々感謝の気持ちを持ち念仏をしていたわけではない。必ず人生のどこかに、阿弥陀如来の慈悲、念仏に深く関わることになるきっかけがあったはずである。それは、初めて仏教に出会うということではなく、さらに熱心に、篤く信仰し、ありがたいと心から感謝することができるようになったというきっかけである。

たとえば、大和の清九郎の場合、産後すぐに妻のまんを亡くし、まだ幼い娘を抱いて光蓮寺へ通うようになった。讃岐の庄松の場合、勝覚寺の第二十代目住職融海和上、そしておなじく勝覚寺の僧侶周天との出会いがある。長門のお軽の場合、夫である幸七の浮気に激しく嫉妬し、その苦しみから通うことになった西教寺の八代目住職現道師との出会い。浅原才市の場合、親の死をきっかけに足を運び行うようになった、万行寺での七里恒順和上、安楽寺での梅田謙敬和上、服部範嶺和上との出会い、そして熱心な聴聞である。足利源左の場合は、父親が往生する前に残した最期の言葉をきっかけに足を運ぶようになった願正寺であり、その願正寺の僧、芳瑞和上との出

会いである。足利源左の入信については第二章第一節にて詳しく記す。そして、この善知識となる人物との出会い、きっかけの後、彼ら妙好人のことばからは死、生きることへの不安が無くなっている。

様々なきっかけであるが、共通するものは「心の不安の解消」即ち「心の安心」である。そのきっかけがあり、気づきがあったとしてもそれが続かない事には意味がなく、一時的なものでしかない。彼ら妙好人の信仰、信心はなぜ薄れることがなかったのであろうか。それは、彼ら妙好人における信仰、信心というものは、なにも遠く特別なものではなく、身近に存在するものであり、彼らの生活の中に常にいつも感じられるものだったからである。加えて、妙好人はとても謙虚であり、謙虚な姿勢だからこそ見ることでできる景色に常に感謝しているということも挙げられる。その景色とは、普通の人々と目に映るものは同じであるが、妙好人のもつ感性からしか発見のできないものに溢れた景色である。しかし、彼ら妙好人は必ず凡夫なのである。妙好人の信仰、信心の基盤には、自分は「煩惱具足の凡夫」の身であるという自覚、謙虚さと、そんな自分こそ救ってくださるという「阿弥陀如来の本願力」への感謝という大きなふたつの要因に支えられ、満ち溢れているのである。

そのような妙好人たちの生き方は、彼らが残したことばにもよく表れている。

第三節 妙好人のことば

妙好人のことばや詩には、なにも難しい学術的なことは書かれていない。ただ他力の救い、仏の慈悲に対しての感謝のことばである。そして自然に起こること、当たり前のように映ることをありのままに表現している。数

多くの妙好人たちに共通していることは感謝である。ありのままを受け入れ、当たり前のように映るものに対し、感謝することができ感性が備わっている。妙好人でなければ気にも留めないところ、当たり前と見向きもしないものに対して喜び、感謝しているのである。普通の人では行わないような行動をとることもあり、ただそれだけを見ると変人のように扱われるかもしれない。しかし、その感謝、ありがたく思うことのできる生活には、念仏の教え、信心と智慧が因として存在しているのである。

『歎異抄』の第七条に、「念仏者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には、天神・地祇も敬伏し、魔界・外道も障礙することなし。罪惡も業報を感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆゑなりと云々。」と書かれている。これがまさに妙好人における信心の生活、無碍の一道なのである。

一般の人であつたら、悪いこと、悲しいことといったマイナスなことであつても、妙好人はありがたいと感謝することができる。しかしこの「マイナス」というのも結局のところ、個人主義的で、視野の狭い、己の物差しでしかものごとを測ることができていない自分の心に起こる「マイナス」なことだからなのである。おなじこととがらに立ち会つたとしても、妙好人と一般の人では感じ方が違う。そのこととがらを肯定できるかどうかで、「マイナス」なのか「ありがたい」のか変化するのである。妙好人にとってはどんなことであつても、その「おかげさまで」「気づかせていただける稀有な機会」であり、「ありがたい価値のあるもの」なのである。

いくつか実際に「妙好人のことば」をあげて考察する。

大和の清九郎がお参りで家を空けている隙に泥棒がはいり、銀札七匁が盗まれてしまった時のことばである。

盗みをするほどの者ならば、さぞかし不自由をしているであろうに、わが家に入っても何も盗るものがなく、さぞ残念であったであろう。しかしながら、先日まで菜種を売った代金が銀札で十五匁あったものを八匁は春以来の洗濯料に支払ったので、残りの七匁しか盗って帰ることしかできませんでした。いつもであれば、この七匁もなかったのですから、よいときに入ってきて、手を空しくさせず、わずかでも盗られるものがあった嬉しく思います。―中略―私も生まれつき凡夫で、盗人を兼ねているような性分ですが、今はお慈悲のおかげで盗み心も起こらず、かえって盗まれる身になったということは有り難いことです。*

この言葉から、妙好人大和の清九郎の「慈悲」と「感謝」を見ることが出来る。本来自らのものを盗まれたなら、強い憤りを感じたり悲嘆したりする。そして少なからず、盗みを働いた相手へ恨みを感じるはずである。しかし大和の清九郎はこのような感情を全く抱く事なく、それどころか盗みを働いた相手を心配し、幸運だと喜び、そして自らの今の立場を改めて気づき、阿弥陀如来の慈悲に対して感謝の気持ちを述べている。盗みにあったとき、自らの生活の不安や、盗みを働いた人物の特定などよりも、盗人や阿弥陀如来という自分ではない相手に対して気持ちが働くというところが妙好人ならではの感性である。またこの普通の人なら「マイナス」な出来事を、「ありがたい」と感じ感謝しているという無碍の一道の生活を大和の清九郎が過ごしていた事がわかる。妙好人の優しさ、謙虚さ、無執着の姿勢がよく現れているエピソードである。

次は、浅原才市の、ありのままに關してのことばである。

京都からきた僧侶の説教を聴き、涙を流して「有難いお話で、日頃の邪見の角が折れた。」とよろこぶ人に対し

て、浅原才市は「又生えにやよいがのう、角がある儘と聞こえなんだか」⁹と言った。

「あさましいの 邪見の角が 生えた まんまで 親にとられて なむあみだぶつ なむあみだぶつ。」¹⁰

この浅原才市のことには、妙好人の他力への気持ちがよく現れており、また悪人正機のことを浅原才市のことばで表現している。聴聞をし、「角」が取れたという人に対して、もっと悪人としての自覚をするべきだ、ということと、聴くだけで取れるような「角」(煩惱)ではないと解釈できる。そして、自分は煩惱具足の凡夫であり、自力では悟りを開けず、地獄へ行く身。このような自分を、凡夫のままに救って下さる阿弥陀如来の他力へ感謝しているのである。この悪人正機、凡夫の自覚に対して足利源左も同じことをいっている。

「これからお念仏をして、良い仏様になってください。」と伝えられた足利源左は、「先生様、何をおっしゃるだいなあ。おらがやあな底下の泥凡夫に、なにが佛になるやあな甲斐性が御座んせうに。だっけどなあ、親様が佛にしてやるとおっしゃいますだけに、佛にしてもらいますだいなあ。」¹¹と言っている。

浅原才市も足利源左も、自分は凡夫であると自覚し、自力ではどうにもならぬから、ありのままに救うと言って下さっている阿弥陀如来の他力にお任せする、と感謝し、まかせているのである。

この阿弥陀如来にまかせる、ゆだねるということを良く表していることばが、足利源左のエピソードの中に存在する。

足利源左が病で寝込んでいるところへ見舞に来た人が「おじいさん、大変ですな。」と声をかけたときの、返事である。足利源左は「えらいこたあないだいや。蓮の花の上に寝させて貰つとるだけなのう」¹²と言った。このよ

うに労いのことばをかけた者としては、おどろくような、またどこか関心するような発言をしている。どんなに苦しい病で、死の存在が大きくなっていたとしても、阿弥陀如来にまかせ、ゆだねているから、安心してありのままの状態を受け入れることができるのである。すでに救われている、約束されていると感謝している。まさに親鸞のいう現生正定聚である。治るかわからない病気や怪我をしたとき、現代ではメンタルケアがとても重要である。しかしかれら妙好人達は、その怪我や病、そして死でさえも、そのなかに感謝する種をみつけ大切に、喜ぶことのできる機会として見ているのである。

足利源左の無碍の一道のエピソードでこのような話がある。

足利源左が仕事の帰りに川に落ちて、怪我をしまして、血まみれになってしまった。そのとき、血まみれの手を「ようこそ、ようこそ」と拝んでいる。不思議に思った人がなぜ拝んでいるのかときくと、「腕が折れても仕方がないに、ようこそ、ようこそ。」¹³と言った。

長男の足利竹蔵が亡くなり、お悔やみの言葉をかけられた足利源左は、「有難う御座んす、竹奴は早うお浄土に参らして貰いました、ええことをしましただがやあ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」¹⁴と言った。

火事に逢い、家を焼失してしまい、願正寺住職芳瑞和上に慰めの言葉をかけられた足利源左は、「御院家さん、重荷を卸さして貰ひまして、肩が軽うになりましたいな。いつかな案じてごしなはんすなよ。」¹⁵と言った。

妙好人は、普通の人は違う感性を備え、独特のすばらしい眼で世の中、そして自らを見つめている。足利源左は自分のことを「底下の泥凡夫」とよんでいたが、まさにその煩惱の泥の中から、信心の白蓮華が美しく華を

咲かせているのである。

第二章 柳宗悦と妙好人

宗教哲学者、思想家、そして民藝の父としても有名な柳宗悦は民藝と同じく、妙好人の研究にも取り組んでいた。妙好人、因幡の源左（足利源左）、また民藝品「妙好品」との出会いが、柳宗悦の宗教観を形成することになる。

そして柳宗悦の有名な思想の中に、「無対辞」というものがある。柳宗悦が研究した、無対辞と足利源左を取り上げて、考察する。

第一節 因幡の源左

柳宗悦が世に紹介した妙好人のひとりに因幡の源左（本名足利喜三郎、通称足利源左衛門）という人物がいる。江戸時代後期の因幡国（現在の鳥取県青谷町）の農家にうまれた。彼の父、足利善助は浄土真宗本願寺派願正寺の門徒であり、信心深く、信仰に篤い人であった。おそらく足利源左も幼いころから父親に連れられ、寺に足を運んだのであろう。しかし、初めから後に妙好人とよばれるような父親譲りの篤い信心、宗教観が身についていたわけではない。そこには、第一章第二節でも述べたように、足利源左にとっての大きな苦しみと悩み、しかし

無くてはならなかった苦しみと悩みがある。足利源左の悩みのきっかけそのものであり、阿弥陀如来の本願力、智慧の気づきのきっかけともなった出来事というのが、父親足利善助の最期の言葉なのである。足利源左が十八歳の秋、安政六年八月二十六日（1859年9月22日）の晩に足利善助は、当時日本で猛威を振るっていたコレラによって往生の素懐を遂げる。そのとき息子である足利源左に残したのが「おらが死んだら、親様をたのめ」という言葉であった。この時のことを足利源左は、

「その時から死ぬるちゆうなあ、どがんこつたらあか。親様ちゆうなあ、どがなむんだらあか。おらあ不思議で、ごつついこの二つが苦になつて、仕事がいづかな手につかいで、夜さも思案し晝も思案し、その年も暮れたいな。翌年の春になつてやつとこさ目が覺めて、一生懸命になつて願正寺様に聞きに参つたり、そこらぢゆう聞いてまはつたいな。」¹⁶

と話している。

その日の朝まで一緒に田んぼへ稲刈りに出ていた父親が、晩にはもう冷たくなっている。この出来事により、人の人生とはこれほどにも儚いものであり、人の死とはこれほどにも身近なものであるのかという疑問が足利源左の心に生まれた。そして、父親の最後に言葉にあった「親様」とは誰のことであり、どこにいるのか、という疑問も持つことになる。父親の死と、父親が残した言葉という二つの悩みを抱えた足利源左は、悩み、苦しみ、願正寺へ足を運ぶこととなる。しかし願正寺の芳瑞和上の話を聞いても、はるばる京都の本山、本願寺へ参り、偉い僧侶の話を書いても、十年以上も足利源左の悩みはなくなることはなかった。それどころか、熱心に寺へ足

を運び京都へも出向いた足利源左を周りの人々は感心し褒めたのだが、それが余計に足利源左を苦しめることになった。これほど聴聞をしても気づけない、分からない自分が情けなくなったのだ。しかし、この十年以上続いた足利源左の悩みは、意外な出来事で解決することになる。柳宗悦は以下のように記している。

それは突如とした契機であつた。夏のことである。いつものやうに朝早く牛を追ふて裏山に草刈りに出かけた。漸く刈り終へて牛の背の右と左とに一把づつを付け、扱、自らでは負ひきれなぬその重い把を更に一つその背に載せた時、突如として彼の心に閃めくものがあつた。彼の言葉を借りると、「ふいつと分かせて貰つた」のである。¹⁷

柳宗悦がこう記しているように、足利源左は「いつものやうに」という、直接信仰や念仏とは関係のないような日常の作業の中から気づいている。重い草の束を牛の左右にのせ、もう一つを自ら担いで帰ろうとしたとき、やはり重くなってきたのでそのもう一つも牛にまかせたとき、阿弥陀如来にすべてを「まかせろ」という「他力」の存在に気づいた。これは、足利源左が熱心に通つた聴聞のなかで「他力」や阿弥陀如来に「まかせろ」「ゆだねろ」といった話、言葉があつたはずである。それが足利源左の心に残っており、「死とは、生とはなんだ」「親様とは誰だ」と毎日、父親の死を経験した十八歳から、分からせて貰つた三十歳前後までの十年近い間悩み、考え続け、そして「いつも」の大変な作業を「牛」という自分以外の力に「まかせろ」ことで、聴聞で得た知識と、牛に草束を任せた経験とが結びつき、「智慧」となり足利源左の気づきにあつたのである。このことを本学の藤能成（1957）は、自身の著書『現代社会の無明を超える―親鸞浄土教の可能性―』の中の「現代社会の無明

を超える―繋がり―の回復―」において、以下のように示している。

釈尊は、智慧を得る方法として、戒・定・慧の三学の実践を説いた。戒を保つことによって、心が乱されない正しい生活が続ける中で、定（瞑想）に入り、慧を修していくのである。慧とは、智慧とも言い、ものごとをありのままに知る力を指す。慧には、聞慧、思慧、修慧の三慧（三段階）がある。釈尊の教えを聞き（聞慧）、教えの内容を繰り返し心に刻み（思慧）、生活の中で体得する（修慧）のである。教えを聞いただけでは、その内容が現実に意味しているものが何か掴むことは困難である。そこで、説かれた教えの意図や内容を正しく理解するために教えの言葉を反芻し心に刻むのである。そのように心に刻んだ教えの内容が、自身が生活する上で、どのようなことを意味しているのかを掴み、気づくのが修慧である。「修慧」において聞いた教えの「言葉」と自身が生きる「現実・体験」が繋がり、一致するのである。¹⁸

まさに足利源左の「分からせて貰った」という事は、この藤能成の言う「智慧」の体得なのである。

足利源左は牛に草束をまかせることで、気づき、「智慧」を体得したのである。柳宗悦の言葉を借りるならば、足利源左の「半世紀餘りにも互る彼の信仰の大生涯」¹⁹が始まったのである。

足利源左はとても謙虚であり、勤勉であり、殺生を嫌い、情に厚く、他人に優しく、それ故に喧嘩の仲裁の名人であり、常に阿弥陀如来の本願力への感謝を忘れない人であった。

第二節 柳宗悦の宗教観

柳宗悦とは哲学者であり、仏教、中でも浄土教思想の思想家である。そしてやはり有名なのが、「民藝の父」としての柳宗悦の顔である。

柳宗悦は河井寛次郎（1890—1966）、濱田庄司（1894—1978）らと共に「民藝運動」を起こした事でも知られる。「民藝」とは民衆的工藝の略称であり、柳宗悦による造語である。柳宗悦のいう民藝品とは、ひとりの天才によって作られた「上手（じょうて）」の物ではなく、名もなき職人によって、自然のままに、自由に、素朴に作られた「下手（げて）」の工芸品のことを言う。また柳宗悦は、民衆的な生活の中で生まれ、生活実用品であった民藝品を自らの妙好人研究と結び「妙好品」と呼んだ。

民藝品の説明のなかに、ありのまま、素朴、貧しい、とある。これはそのまま妙好人にも言える。妙好人、妙好品のふたつに共通するものは、分けることをしない、ありのままであり、自己主張をせず、謙虚に生きているということである。このように柳宗悦は、「妙好品」と呼ぶ民藝品の中の真実の美しさに、無分別、不二、如、そして「自然法爾」の境地を見たのである。

阿弥陀如来の慈悲は、分け隔てなく振り向けられる。どのような人生、どのような人物であっても、分別することなく、救い上げてくださる。というよりも、阿弥陀如来の物差しでは、我々人間の小さな見栄や、格差などは微々たるものであり、おなじ価値のある大切な「命」なのである。よって、救いの対象に悪人が一番に出てくるのである。自力では悟りを開くことのできない煩惱具足の凡夫こそ、救われるのである。阿弥陀如来からすれ

ば、分けることなく皆尊く、ありのままに皆美しいのである。柳宗悦は仏国土の例を「美の浄土」のなかで上げている。浄土では、人間の物差しで測ったような「美」「醜」などは存在しない。しかし、醜いものが存在しない、きらきらと輝いた美しい世界というわけではなく、阿弥陀如来の物差しからすれば我々からした美しいものも醜いものも、すべて超えた、包んだ「真実の美」なのである。

また柳宗悦は民藝品を説明するとき「美醜を超える」という言葉を使っている。ものの美しさを説明するときどうしても、「美しい」か「醜い」かどうかと考えるしまう。しかし、この民藝品の美しさがあるのは、美醜を超えたところにあると柳宗悦はいう。それは、「美」や「醜」といった二つに縛られるような不自由な美しさではなく、決して対辞することのない自由な美しさである。このことを柳宗悦は、「不完全を厭う美しさよりも、不完全をも容れる美しさの方が深い。」²⁰と説明している。醜さを切り捨てて選んだ、二元的、西洋的な美しさよりも、東洋的な、対辞しない自由な美しさである。このことを柳宗悦は、「無対辞」と呼んでいる。

第三節 「無対辞文化」

第一章、第二節「妙好人のことば」にもあげたように、妙好人の感性には独特のものがある。一般の人々、あえて言うなら現代を生きる人々にはなかなかできないような感性をしている。妙好人のことばには、現代人からすると考えもつかない直観からのことば、一見非常識であり非論理なことば、優しすぎて損をしているように思えることば、謙虚そして心からの感謝のことばが多くみられる。それらは「東洋的思想」であり、柳宗悦の言

う「無対辞」からのことばなのである。

柳宗悦は自らが著した「無対辞文化」のなかで、「対辞」「無対辞」という言葉を使い西洋的思想と東洋的思想の違いを示している。西洋的思想とは、論理的、科学的、二元的、分別によってものごとを思考する思想である。対して東洋的思想とは、非論理的、直観的、柔軟的であり無分別の思想である。柳はこの東洋的思想に無対辞はあるとしている。

柳は「勝負（勝敗）」を例に出し、ことわざを用いて説明している。

東洋の考へ方を注意してみると、勝とか負けるとかの二元相剋の束縛から、脱け切らうとする願ひを込めた表現が中々に多い。——中略——「暖簾に腕押し」といふ言葉も、勝負の世界をかはして、無勝負の世界に出ることである。ここに此句の妙味が潜むのである。勝たうとすれば負けることもある。處が一旦勝負の籠を外して了ふ。勝ちもなく又負けもない境地に入つて了ふ。かういふ無対辞の境地にこそ、東洋人は深く心を惹かれて来たのである。²¹

このように、「二つに一つ」「勝ち負け」「シロクロ」といったものでは分別されないものが無対辞なのである。おなじもので仏教の「中道」があげられる。極端に偏ることをしない。どちらでもあって、どちらでもない。分別せず、比べず、対することもせず広くものごとを考えることなのである。しかし、人間はどちらかはっきりしていないと不安であり、どうしても論理的、二元的にはつきりさせようとしてしまう。「比べる」ことから苦しみが生まれるのである。柳宗悦は「無対辞文化」のなかで「柳の木」の例に挙げ、説明している。強風するとき、柳

の木や枝は風に身をまかせ、ゆだね、風を受け流すが、松の木は勝負に出ようとして、折れたり、根っこから引っこ抜かれたりしてしまふ、という。²²これこそ松の木が「勝ち負け」にこだわった末に折れてしまった（負けてしまった）喩えである。

この、柳宗悦のいう無対辞の生活を送っている人が、まさに妙好人なのである。普通ならば「マイナス」である出来事の中からも感謝する心を見出している。「負け」とされることにも、なにかと比べられて劣っていたとしても、貶されたとしても、腹も立てず、凡夫と気づかさず、感謝をする。これは、凡夫としての自覚ともいえるが、ものごとを見る時に阿弥陀如来と同じような物差しで見ているからである。よって、どんな人でも、ペンペン草であつても、牛であつても、凡夫である自分でも、阿弥陀如来からすれば同じ命であり、美しいのである。

「二つに一つ」という選択の仕方、西洋的でありどちらかが選ばれたということは、一方は切り捨てなければならぬということである。足利源左のエピソードで、無対辞のエピソードがある。村の青年会で足利源左が鯛を料理して出すことになった時、調理方法について頭を残す方が良くとする人と、頭を取った方が良くとする人がいた。食事の時がきて、皿を見てみると、頭があるものと無いものが二つ並んでいたのである。²³

これは足利源左の優しさであり、調理法を教えてくれた人への気遣いなのである。勝負もしていなければ、負けて心に苦痛を感じる人も誰もいない。足利源左はこの二つとも摂取し、大切にしたのである。

第二章第二節でもあげたように、柳宗悦は民藝の美醜を超えた真実の美、即ち「不二の美」の中にまさにこの

無対辞を見ている。対辞することなく、勝負や比較から怒りや劣等感が生まれる事がない。柳宗悦は、このような無対辞の生活のことを、まさに妙好人の生活とし、「安心の生活」と呼んでいる。

第三章 現代社会と妙好人

現代において新しく生まれてきた様々な問題の中で、特に心に関する問題が表に多く表れてきている。また医療や介護なども、社会問題となってきた。その中で注目されるものが、精神面へのスピリチュアルケアであり、医療、福祉に加え、仏教を取り入れたビハーラ活動である。対辞し、比較し、比べてしまい、それ故の苦しみが生まれるこの現代社会において、妙好人の何が救いとなるのかを考察する。

第一節 ゆだね、まかせられる安心

現代社会には「安心」が不足している。現代人は、なかなか心にゆとりが持てないでいる。なぜなら、様々なものに不満、不安を感じ、それによって悩みが絶えないからである。悩みというものは、日常生活における人間関係や金銭面、将来のことなど、大小様々である。しかし、大抵のものは問題の根本的解決にはなっていないとしても、一時的に満たされたと錯覚すること、またその場だけの成功によって頭から離れることがある。しかし、どれほど一時的に頭から離れたように見え、忘れていたとしても、必ず我々の頭の奥底に深く沈んでいるものが

ある。生きてゆくうえで、どうすることもできないものが生、老、病、死なのである。

どうすることもできないという苦しみは、やはり「対辞の思想」によるものなのである。柳は「無対辞文化」の中で、對辭の二元界に彷徨ふ限りは、人間は遂に不安から離脱する事が出来ない。それ故「無對辭」、即ち「不二」の門に入る事のみが「安心」を與てくれるのである。²⁴と記している。己の論理的な限界、科学的現代医学の限界、知識では分別できないことがら、比較による劣等感などから生まれる苦である。「病気が、治療によって、治る」という、一見一つの意味にしか捉えられない文章でも、病気の種類、治療方法、それによる結果によって様々な文章になってくる。患部が病気になる前に戻ったのか、転移しないように摘出したのか、機能していないため入れ替えたのか、などといった様々な意味を持つ結果になっている。必ずしも「治った」か「治らなかった」の二つに一つではない。しかし対辞的に見てみると、そのようなことは関係なく「治す（病気になる前の状態に戻りたい）」ため治療を行っている。よって、実際の現状との違いに苦しむのである。「若くしてこの世を去った」という文章も、そのひとの人生、人となりを考えただ可哀想、という感想が浮かんでしまう。平均寿命という比べることのできてしまう数字によって、また苦しむことが増えるのである。

アンチエイジングや、医学的措置、延命治療などで一時的に少しだけ遠ざけることは可能だが、決して消し去ることはできない。釈尊の四門出遊にもあるように、時代が変わろうと、場所が変わろうと、これらは人類の永遠の苦しみなのである。

「安心」即ち心の健康、平安に近づくためには、それらの苦しみをありのままに受け入れるしかないのだ。し

かし、それは、必ずしも悲観的な「諦め」による受け入れではない。妙好人は古い、病に侵され、死に直面する、といった不幸（マイナス）と感じる事柄からから目を背けず、ありのままに受け入れている。この困難で大変なことを可能にしているのが、信心の生活、安心の生活である。

眞実信心による生活が、不幸（マイナス）と感じてしまうことがらを「おかげさまで」と変換し、念仏によって救われていることを実感し感謝することによって「安心」して古いも病も死も自然のはからいとして、ゆだねることができる。これが、妙好人の感性であり、「無碍の一道」「自然法爾」なのである。

2015年11月5日に龍谷大学で行われた特別講義「医療現場から見る 現在の伝道の可能性」において、浄土眞宗本願寺派布教師、浄土眞宗本願寺派ビハーラ活動推進委員の長倉伯博（1953―）が講義を行った。終末期の患者との会話で、「がんになったからあなたに会えた。今なら、がんにありがとうと言える。」という言葉があった。一般的に大きな病氣、怪我それも治る見込みがないと言われればそれは不幸（マイナス）な出来事である。しかしこの患者は、不幸（マイナス）であるものを、幸せ、感謝（プラス）に変換し感謝している。もちろん最初から感謝の心が起こっていたわけではなく、長倉伯博と接していく中で、癌という病、癌によって再確認できた己の死、そして今の自分の置かれている状況を少しずつ受け入れられるようになり、心に安心が起ころことで生まれた感謝である。

この一般的に不幸（マイナス）である癌がきっかけで長倉伯博と出会い、その中で他者と比べず、まかせゆだねる心の安心という気持ちを見出し、出た感謝（プラス）の言葉が「無碍の一道」「自然法爾」であり、妙好人た

ちがたどり着いた境地なのである。「なぜ自分だけがこんな病気に」「まだ若いのに」「家族に迷惑をかける」というとらわれの気持ちを失くし、自然の、ありのままにまかせることが「自然法爾」なのである。これこそが本当の心の健康であり、妙好人のゆだねまかせられる安心の生活、心の平安なのである。

結論

現代社会において、分別、対辞による苦しみはとても多い。よって、このような苦しみの多い社会だからこそ、柳宗悦の言う、無対辞の生活、安心の生活を送った妙好人たちの思想、そしてそのことばが必要なのである。

戦後の科学主義的教育の中で、自由で、自在である東洋的思想の学びというものもは少なくなってしまった。「マルカバツか」「正解を選べ」「答えは合っているがそれに至る経緯が違う」といった、正解が固定化しており自らの発想で答えを導き出さなくても良いものが増えてきている。数学や科学など、理系の持つ性質上仕方がないものもあるが、それを国語や道徳、そして生活的指導に当てはめてしまうとおかしくなってくる。教える側としては伝えやすく、楽なのだが、教育を受ける側としては不自由であり縛られている。自由で柔軟な発想が失われてしまうのだ。

幼い子どもの絵というものは、何にも縛られていない。柔軟な思考で、自在な形で、自由な色彩で、見たもの

を描く。正しくは、見たものを自らの、何にも縛られていない心に落とし込み、常識から外れたような、一般の道理ではできない表現の仕方をする。しかし、年を重ねるごとに学問の「美術」としては上達するが、個性、自由な表現、オリジナリティというものは失われてしまう。風景や人物描けば、写真に近くなる。それが間違っているというわけではなく、あたりまえというものにとらわれ、幼い頃のような自由な表現はしなくなる。なぜなら、周りの大人からおかしいといわれ、減点をされるからである。妙好人は、この子どものころの自由な発想、何にもとらわれない考えをそのままもった人たちである。

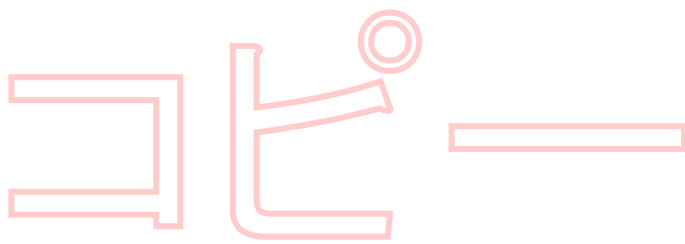
妙好人たちは個人の縛られた物差しでの見方を捨てて、広く、自由な見方、考え方をしているのである。足利源左の大雨に降られた時、鼻の向きに感謝した話も然り、²⁵ 妙好人ならではの感性で物事を見ている。比べる事せず、対辞せず、ありのままの世界の美しさをみている。とらわれのない妙好人の考えは、現代社会を生きる我々に足りないものである。

比較することで生まれる苦しみは、現代社会の生活の中からはなかなか離れることはできない。しかし、妙好人のことばには、謙虚さ、無分別、無執着、そして無対辞を見る事ができ、対辞による争いが起こらない、平和な世界があることがわかる。

足利源左のことばで、「お上さん、この世のこたあ、何につけ「させて」の字をつけなはんせえよ、貰ふぢやなあて「貰はさせて」貰ひなはれ。こらへるぢあなあて「こらへさせて」貰ひなはれ。」²⁶ というものがある。これは、妙好人ならではの自覚があつての謙虚さから生まれてくる言葉である。比較し、自分が優位に立っている

と錯覚している、傲慢な人からは出ない言葉である。またこの自覚から、不幸（マイナス）にあっても「おかげさまでさせていただく」と変換することができる。己の物差しを捨て、比べず、ありのままを見ることで、謙虚に自覚する事が出来る。このような素晴らしい思想の妙好人だが、彼らに煩惱が無いわけではない。「煩惱は必ず私の中にある」と自覚しているからこそ、煩惱にとらわれないのである。

今、現代社会を生きる我々には、妙好人のことにばに現れているような、とらわれから離れ、自覚し、まかせゆだねる自然法爾、ありのままに感謝する心の平安、無碍の一道、そして、柳宗悦のいう対辞、比較の無い無対辞の生活、民藝という美醜をこえた真実の美、安心の生活が必要なのである。



参考文献

- ・ 梯 實圓 『歎異抄』 本願寺出版社 2002年
- ・ 梯 實圓・松田 正典 『妙好人に学ぶ』 自照社出版 2013年
- ・ 菊藤 明道 『妙好人の詩』 法藏館 2005年
- ・ 教学伝道研究センター編 『浄土真宗聖典（注釈版 第二版）』 本願寺出版社 2004年
- ・ 佐々木 正 『妙好人の真実 法然、親鸞へ信への系譜』 春秋社 2012年
- ・ 白川 晴顕 『妙好人のことば ―信心とその利益―』 本願寺出版社 2015年
- ・ 寿岳文章編 『柳宗悦 妙好人論集』 岩波文庫 1991年
- ・ 眞宗聖典編輯同人 『眞宗聖典』 永田文昌堂 1956年
- ・ 鈴木 大拙 『妙好人』 法藏館 1976年
- ・ 浄土真宗聖典編纂委員会編 『浄土真宗聖典 七祖編（注釈版）』 本願寺出版社 1996年
- ・ ビハーラ医療団編 『ビハーラ医療団 ―学びと実践―』 自照社出版 2012年
- ・ 柳 宗悦 『無対辞文化』 『柳宗悦全集著作編 第十九卷』 筑摩書房 1982年
- ・ 柳 宗悦 『南無阿弥陀仏』 岩波文庫 1986年
- ・ 柳 宗悦 『美の法門』 岩波文庫 1995年
- ・ 柳 宗悦・衣笠 一省編 『妙好人 因幡の源左』 百華苑刊 1960年
- ・ 那須 英勝 「ヨーロッパの妙好人と「無対辞」の思想 ―ハリー・ピーパー師の事績を通して―」
龍谷大学 真宗学会 『真宗学』 第133号 平成28年3月
- ・ 藤 能成 「妙好人と智慧 ―柳宗悦「無対辞文化」が投げかけるもの―」
龍谷大学 真宗学会 『真宗学』 第129・130合併号 平成26年3月